



猿橋 眞著

『日本労働運動史』

戸木田嘉久

本書は、「積極的・戦闘的伝統を学ぶ」という視点でまとめられた、「日本労働運動史」の最新版、活動家むけ学習テキストである。これまでも谷川巖『日本労働運動史』、犬丸・辻岡・平野共著『戦後日本労働運動史』（以上、学習の友社）などがあった。だが80年代の全労連が結成された過程と、90年代から「今日の課題」までを盛りこんだものとしては、本書が初めてである。

著者は、1950年代から労働運動歴があり、大阪衛都連委員長を経て、80年代から90年代初頭にかけては、中央統一労組懇常任代表委員、ナショナルセンター結成準備委員、全労連結成時の専従副議長として、全労連結成の中心にあった。また現在、労働者教育協会副会長、関西勤労者教育協会副会長でもあり、労働者教育の活動歴も長い。

新しい『日本労働運動史』の全体的な特質は、著者のこの両面にわたる経歴と素質が大いに生かされている点にこそあるといえよう。

著者は、本書の「はしがき」で「いまなぜに日本労働運動史を学ぶのか」と問いかけ、つぎの三つの課題を設定されている。

第一は、日本の労働運動の不屈の伝統をうけつぎ、自分たちが担う歴史の重さと労働者として生きるすばらしさをまなぶこと。第二は、事実即して歴史をつらぬく法則性とその理論をたしかめること。第三は、すべての苦しみの根源を明らかにし、その根源の変革をめざしてたたかうためにまなぶこと。

私はこの勉学の目的には賛成だが、著作の全体をとおしてその意図は成功しているかと思う。具体的にそのことを指摘していく余裕はないが、

「戦前の労働運動の教訓」（61－70頁）、「戦後日本の労働運動は何を教訓しているか」（264－272頁）など、私自身も、提出されている問題の深さを熟慮させられるところがあった。

全体を通読し昨今の日本状況にあわせて、私なりに考えさせられたことがある。なによりも戦後労働運動と新日本国憲法の50余年という動かしがたい歴史の重みを痛感させられた。この50余年を敗戦の1945年から逆にさかのぼると、1897年片山潜による労働組合期成会の結成を超え、1890年大日本帝国憲法の発布にいたる。この歴史のなかに定着した労働運動と新憲法は、その平和と民主主義の内容をさらに発展させねばなるまい。

他方、戦後五十余年は、本書をとおしてこの対米従属関係、とりわけ50年を画する日米安保条約の歴史的制約と屈従を痛感させられる。これは、余りにも長きにすぎることではあり、早々に撤廃されねばなるまい。

（学習の友社・2001年4月刊・2400円）

（ときた よしひさ・労働総研顧問）

京滋地区私立大学非常勤講師組合

『大学非常勤講師の実態と声 2001』

仲野（菊地）組子

はじめに

私立大学では、正規雇用である専任の教員数の倍ほどの非常勤講師がおり、非常勤講師がいなければ、授業は成り立たないことは、あまりよく世間に知られていることではなかった。ましてや、主に大学非常勤講師のみで生計をたっている専業非常勤講師が、その多い非常勤講師のなかの半数近くを占めていることも、知られてはいなかった。そしてなかなか信じてもらえないことは、およそ専任教員の約7分の1の賃金で、年収263万円という貧困生活を送っていることである。その貧困生活の中で、専任教員とはまったく異なり、教材費や研究費は、すべて自前である。

1995年に京滋地区大学非常勤講師組合が、1996年に首都圏大学非常勤組合が、そして1999年に